

インド中世史研究の現状

——研究史的回顧(1)——

近 藤 治

Present Conditions of the Study of Medieval Indian History

——A Bibliographical Review (1)——

Osamu KONDO

1 は し が き

本稿は先に成稿をみた『アジア歴史研究入門』第5巻（同朋舎，1984年4月刊行予定）所収の拙文「インド中世史」と対をなすものである。そこではインド中世史の資料解説を中心的に行ない，併せて研究のための工具と参考文献も紹介しておいた。研究文献の調査と解説も本来同時に発表する予定であったが，紙数の制約上そこに納めることができなかったため，本稿の如き別の形で発表することにした次第である。

ここにいうインドの中世史は，別稿でも説明しておいたように，北インドにムスリム政権が成立した13世紀初からムガル朝が衰退し，代ってヨーロッパ諸列強，とりわけイギリスの進出・侵略活動が活発となった18世紀中葉までの約5世紀半の時代を主としてさしている。インド史上，この時代はイスラム文化が在来文化の上に接合されて，それとの融合，深化が進んでいった時代であった。普通，この時代は1206年にデリーを首都として成立したインド最初のムスリム王朝のマムルーク朝，いわゆる奴隸王朝からはじめてロディー朝末に至るデリー=スルタン朝期ないしデリー=サルタナット期と総称される時期と，1526年に成立しそれ以後つづくムガル朝期とに，大きく二分される。本稿でもデリー=スルタン朝史とムガル朝史に分けて，現状に至る研究史の概要を項目別に以下に概観してゆくことにする。なお，小論では北インド史を中心に論じており，南インド史については残念ながら詳しく触れることができなかった。また小論中で使用した欧文雑誌等の略語は末尾に一括して記しておいたので，参照していただけるとありがたい。

2 デリー=スルタン朝史の研究史

デリー スルタン朝時代を扱った概説書として、古くは *The Cambridge History of India, Vol. III: Turks and Afghans*, ed. by W. Haig, London, 1928 があるが、独立後のインド人学者の手になるものとして、Majumdar, R.C. (general ed.), *The History and Culture of the Indian People, Vol. V: The Struggle for Empire, Vol. VI: The Delhi Sultanate*, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1957-67 や Habib, M. and K.A. Nizami (eds.), *A Comprehensive History of India, Vol. V: The Delhi Sultanat (A.D. 1206-1526)*, New Delhi, 1970 などの大冊が世に出された。とくに後者は第一線の専門家の手になる各地方史も収め、この時代に関する総合史の観を呈している。パキスタン人学者による概説書としては、Qureshi, I.H. (general ed.), *A Short History of Pakistan, Vol. II: Muslim Rule under the Sultans*, by M. Kabir, Karachi, 1967 が比較的小冊ながらよくまとまっている。最近のものとしては Mehta, J.L., *Advanced Study in the History of Medieval India, Vol. I (1000-1526 A.D.)*, New Delhi, 1979 があるが、書名に反して平板な概説の域を出ていない。その後に刊行された Sharma, L.P., *Medieval History of India (1000-1707 A.D.)*, New Delhi, 1981 な学生向の教科書として書かれたものである。

わが国では荒松雄氏の一連の論文、すなわち「ムスリム支配体制とインド社会」『世界の歴史』13, 筑摩書房, 1961年; 「ムスリム支配成立期における政治権力と宗教」『インド史における土地制度と権力構造』所収, 東大出版, 1969年; 「インドにおけるムスリム支配の成立」『岩波講座世界歴史』13, 1971年などがこの時代を理解するための好個の入門の役割も果たしてくれる。この時代を大局的にどのように把握するかという点で示唆に富むインド人学者の論文としては、Habib, M., “An Introduction to the Study of Medieval India (A.D. 1000-1400)”, *Aligarh Magazine*, I-1・2, 1931; do., “Introduction” to Elliot and Dowson’s *History of India*, Vol. II, Indian edition, Aligarh, 1952 (両論文は次の著作集に再録されている。 *Politics and Society during the Early Medieval Period*, collected works of Professor Mohammad Habib, Vol. I, ed. by K.A. Nizami, New Delhi, 1974); Nizami, K.A., “The Delhi Sultanate and the Mughal Empire: Genesis and Salient Features”, *IC*, 55-3, 1981 などがある。M. ハビーブの都市革命論によるムスリム政権成立事情の説明は、インド内外の学界に大きな刺激を与えた。

アラブのシンド征服からガズニ朝を経てゴール朝へとつづくムスリム勢力進出時代に関する研究としては、まず M. ハビーブの数多い論文があるが、それらは彼の上記著作集第1巻および近刊の第2巻(1981年刊)に収められているので、利用しやすくなった。Habibullah, A.B.M., *The Foundation of Muslim Rule in India*, Allahabad, 1st ed., 1945, 2nd rev. ed., 1961; Bosworth, C.E., *The Ghaznavids*, Edinburgh, 1963 および Nazim, M., *The Life and Times of Sultan Mahmud of Ghazna*, Cambridge, 1931, rep., New Delhi, 1971 も参考になる。Ashok,

K.S., *India as Described by the Arab Travellers*, Gorakhpur, 1967 は興味深いテーマを追った仕事であり、サンスクリット文献をも併せ紹介しているが、水準はさして高くない。

マムルーク朝ないし奴隷王朝からロディー朝に至るデリー=スルタン朝期の政治史的研究としては、この時期を包括的に扱ったものとしてまず Qureshi, I.H., *The Administration of the Sultanate of Delhi*, 4th rev. ed., Karachi, 1958 が挙げられる。これは君主・宮廷・内閣・財政・軍隊・司法・宗教と教育・地方統治・統治理念等について記した教科書的書物である。Tripathi, R.P., *Some Aspects of Muslim Administration*, Allahabad, 1966, それに Day, U.N., *Administrative System of Delhi Sultanate (1206-1413 A.D.)*, Allahabad, 1959 および do., *The Government of the Sultanat*, New Delhi, 1972 もこの時期の支配体制を扱っており、さらに最近の包括的研究としては Banerjee, A.C., *The State and Society in Northern India, 1206-1526*, Calcutta-New Delhi, 1982 がある。君主権の問題を扱ったものとしては Siddiqi, I.H., *Some Aspects of Afghan Despotism in India*, Aligarh, 1969 がある。それぞれの個別王朝を扱った政治史的研究としては、以下のようなものがある。すなわち Ahmad, M.A., *Political History and Institutions of the Early Turkish Empire of Delhi (1206-1290 A.D.)*, Lahore, 1949; Lal, K.S., *History of the Khaljis A.D. 1290-1320*, rev. ed., Bombay, 1967, rep., New Delhi, 1980; Husain, A.M., *Tughluq Dynasty*, Calcutta, 1963; Banerjee, J.M., *History of Firuzshah Tughluq*, New Delhi, 1967; Halim, A., *History of the Lodi Sultans of Delhi and Agra*, Dacca, 1961; Lal, K.S., *Twilight of the Sultanate*, 2nd rev. ed., New Delhi, 1980 などである。また M. ハビーブの上記著作集第2巻に収められた“Campaigns of Alaaddin Khalji”, “Muhammad b. Tughluq”, “Empire of Delhi in Early Middle Ages: organization of the central government” の諸論文が参考になる。わが国では、荒松雄「奴隷王朝前期における奴隷貴族について」『東洋学報』40-3, 1958年や恵谷俊之「13・4世紀におけるモンゴル軍のインド侵入」『史林』48-5, 1965年がある。

経済史の分野では、ムガル朝時代と併わせてこの時代の土地制度を研究した W.H. Moreland の *The Agrarian System of Moslem India*, Cambridge, 1929, rep., Delhi, 1968 がすでに古典的位置を占めている。Irfan Habib は1969年度のインド歴史会議中世史部門の会長挨拶報告で、この時代の生産技術の新動向、とりわけ給水・灌漑用に使われるペルシア式揚水車輪の導入に注意を喚起した(“Technological Changes and Society, 13th and 14th Centuries”, Presidential Address, Medieval India Section, 31th Session of the Indian History Congress, *PIHC*, 1969)。また彼は“Economic History of the Delhi Sultanate—an essay in interpretation”, *IHR*, 4-2, 1978 において、父 M. ハビーブの提起した都市革命論が過大評価のようにみえるとして、ムスリム政権成立期の社会変革により控え目な見方を示すとともに、むしろこの時代における都市の発達、手工業生産の増大、商業の発展の三面に注意を向けた。西北インドと西アジアとの交

通関係を調べた Verma, H.C., *Medieval Routes to India: Baghdad to Delhi, a study of trade and military routes*, Calcutta, 1978 は新しい傾向の研究といえる。最近公刊された *The Cambridge Economic History of India, Vol. I: c. 1200-c. 1750*, ed. by T. Raychaudhuri and I. Habib, Cambridge, 1982 では、その第1部がデリー=スルタン朝期の北および南インドの経済史にあてられており、最新の成果を広く取り込んだ叙述がなされている。北インドに関しては、直前の経済状態、およびこの時代の農業経済、非農業生産と都市経済、貨幣制度についてそれぞれ叙述されている。

社会史ないし生活史の分野では、M. ハビーブの著作集第1巻に収められた“Hindu Society in the Early Middle Ages”, “Indian Culture and Social Life at the Time of the Turkish Invasions”の2論文や、名著の誉れを博している Ashraf, M., *Life and Conditions of the People of Hindustan*, New Delhi, 1959のほか、最近では Misra, S.C., “Social Mobility in Pre-Mughal India”, *IHR*, 1-1, 1974; Srivastava, K.L., *The Position of Hindus under the Delhi Sultanate 1206-1526*, New Delhi, 1980; Siddiqi, I.H., “Life and Culture in the Sultanate of Delhi during the Lodi Period (1451-1526 A.D.)”, *IC*, 56-3, 1982 のような注目される仕事が出てきている。Digby, S. *The War-horse and Elephant in the Delhi Sultanate*, Oxford, 1971 はこの時代の戦争に欠かされない軍馬、軍象に関する研究で、社会史的観点からしても面白い。

文化史・宗教史の分野では、内外ともに重要な成果が発表されている。山本達郎・荒松雄・月輪時房『デリー——デリー諸王朝時代の建造物の研究』全3巻、東大東洋文化研究所、1967-70年は、入念な現地調査をもとにした巨冊の研究報告書である。荒氏は1960年代以来数多く発表されてきた重厚な論文をもとにして、大著『インド史におけるイスラム聖廟——宗教権威と支配権力』東大出版会、1977年を著し、国の内外で高い評価を受けた。この書では、イスラム神秘主義=スーフィズムと関係深いムスリム建造物、とくに聖廟(dargāh)の精細な現地調査と文献資料の検討を通して、この時代およびムガル朝期の支配権力と宗教権威の対応・依存の関係を多面的に論じている。この書と平行して発表された同『ヒンドゥー教とイスラム教——南アジア史における宗教と社会』岩波新書、1977年では、両教義体系の特徴やイスラム教の浸透過程、ヒンドゥー教との共存、融合、対立の諸側面が簡明に説かれている。月輪氏もまた「サルタナット期デリーのイスラム建造物にみられる比例について」『東文研紀要』66, 1975年をはじめ、モスク等イスラム建造物の建築史的研究に関する多くの成果を発表している。荒氏が開拓された研究分野と比較的近い宗教史ないし宗教文化史に関するインド人学者の研究としては古くは M. ハビーブの“Early Muslim Mysticism”, “Shaikh Nasiruddin Mahmud Chiragh-i Delhi”, “Chishti Mystics Records of the Sultanate Period”(いずれも著作集第1巻再録)や、また Nizami, K.A., *Some Aspects of Religion and Politics in India during the Thirteenth*

Century, New Delhi, 1961 があり, また新しくは Rizvi, S.A.A., *A History of Sufism in India, Vol. I: Early Sufism and its History in India to 1600 A.D.*, New Delhi, 1978 や Siddiqui, M.H., *The Memoirs of Sufis Written in India (Reference to Kashaf-ul-Mahjub, Siyar-ul-Auliya and Siyar-ul-Arifin)*, Baroda, 1979 などがある。Husain, Y., *Glimpses of Medieval Indian Culture*, Bombay, 1957 はマドラス大学での集中講義の内容を収めたもので、ヒンドゥー教バクティ信仰とイスラム教, インドのスーフィズム, 中世の教育制度, ウルドゥー語の発生と発展などのテーマを論じている。また Rashid, S., *Society and Culture in Medieval India (1206-1526)*, Calcutta, 1969 は飲食物, 生活様式, 祭, 婦人の地位, 教育, スーフィの役割, ヒンドゥー・ムスリム関係などを論じており, 上記フサインの書同様, いわゆる社会史と文化史との接点を探ろうとした仕事といえる。なお, Khan, I.A., "Origin and Development of Gunpowder Technology in India: A.D. 1250-1500", *IHR*, 4-1, 1977 は技術史上の火薬問題を検討したもので, 従来の通念よりも火薬の普及を早期にみており, 興味深い。なお, 荒氏は最近さらに「デリー=サルタナット末期のモスクとローディー支配層」『東文研紀要』88, 1982年を發表された。

デリー=スルタン朝期の地方史研究として, まずはグジャラート地方に関する次の書物をあげることができる。すなわち Commissariat, M.S., *A History of Gujarat*, Vol. I, Bombay, 1938; Dar, M.I., *Literary and Cultural Activities in Gujarat under the Khaljis and the Sultanate*, Bombay, 1960; Chaube, J., *History of Gujarat Kingdom, 1458-1537*, New Delhi, 1975. ついでベンガル地方の研究としては Karim, A., *Social History of the Muslims in Bengal down to A.D. 1538*, Dacca, 1959; Rahim, M.A., *Social and Cultural History of Bengal 1201-1576*, Karachi, 1963; Sarkar, J.N. (ed.), *The History of Bengal, Muslim Period*, Calcutta, 1948, 2nd ed., Patna, 1973; Blochmann, H., *Contributions to the Geography and History of Bengal (Muhammadan Period)*, Calcutta, 1968 などがある。最後にあげたブロックマンの書は, ムガル朝期の『アクバル会典』第1巻の翻訳者として著名な彼が雑誌 *JASB* に1873-75年3回にわたって発表した論文を覆刻したものである。グジャラート地方の西のシンド地方については Khuhro, H. (ed.), *Sind through Centuries, proceedings on an international seminar held in Karachi in spring 1975 by the Department of Culture, Government of Sind*, Karachi, 1981 がこの地方の初期ムスリム時代に関する論考を多く収めている。中央インドのマールワ地方に関しては, Day, U.N., *Medieval Malwa, a political and cultural history, 1401-1562*, New Delhi, 1965 がある。その南にあったムスリム地方王国ハンデーシュ(1382-1601)の成立から崩壊に至る歴史は, 小冊ながら Husain, M., *Khandesh in New Light, based on a study of Persian and Arabic sources*, Bangalore, 1963 がよくまとまっている。さらにその南に広がるデカン地方のバフマニー朝およびこれにつづくムスリム諸王朝時代について

ては, Sherwani, H.K., *The Bahmanis of the Deccan: an objective study*, Hyderabad, 1953; Husaini, S.A.Q., *Bahman Shāh, the Founder of the Bahmani Kingdom*, Calcutta, 1960; Yazdani, G. (ed.), *The Early History of the Deccan*, 2 vols., Oxford, 1960; Sinha, S.K., *Medieval History of the Deccan, Vol. I: Bahmanis*, Hyderabad, 1964; Sherwani, H.K. and P.M. Joshi (eds.), *History of the Medieval Deccan, 1295-1724*, 2 vols., Hyderabad, 1973-74 などがある。最後の書は第1巻が主として政治史, 第2巻が文化史を扱い, それぞれ600ページを越える大冊である。また変ったところでは, スーフィズムのデカン地方における浸透と展開を扱った Eaton, R.M., *Sufis in Bijapur*, Princeton, 1978 がある。また深沢宏「デカン諸王朝とラージプート体制」『岩波講座世界歴史』13, 1971年, 同「アーディル・シャーヒー王国(1489-1686)の地方支配に関する一研究」同氏著『インド社会経済史研究』所収, 東洋経済新報社, 1972年も大いに参考になる。この他の地方史に関しては, 小論では割愛せざるをえない。またデカン地方のさらに南方に位置する南インドのこの時期に関する研究についても触れることはできないが, 辛島昇「ヴィジャヤナガルの政治と社会」『岩波講座世界歴史』13, 1971年をはじめとする辛島氏の一連の研究があり, それらによってさらに研究史上の諸文献や問題の所在を探ることができる。

本稿で使用した略語一覧表

IC	<i>Islamic Culture</i>
IHR	<i>Indian Historical Review</i>
JASB	<i>Journal of the Asiatic Society of Bengal</i>
PIHC	<i>Proceedings of the Indian History Congress</i>
東文研紀要	東京大学東洋文化研究所紀要